

第3章

推進者のための ご近所ふくしの整備手帳

第1節 「ご近所」とは何を指す？

～遠くの親戚、近くの他人を考える～

第2節 ご近所ふくしは“住民の流儀”を心得ることから始まる！

第3節 今あるご近所ふくしをメンテナンス

～点検・整備・補修～

第4節 さあ、マップづくりを始めよう！



平成29年度 講座の様子

第3章

推進者のためのご近所ふくしの整備手帳

第1節

「ご近所」とは何を指す？ ～遠くの親戚、近くの他人を考える～

主体的な助け合いとはどの圏域で行われているのか、実態を理解するところから始まる！

皆さんは、「ご近所」と聞いて、どれくらいの世帯で何人の住民さんの顔を思い浮かべますか？

従来の公的サービスが提供される地域福祉の圏域は、市町村の第1層、中学校区・小学校区の第2層、自治区の第3層の単位で考えられ、それに合わせて支援体制も構築されてきました。しかし、住民相互の支え合いは、さらに小さい圏域である「顔と顔」の見える範囲で行われているというのが、ご近所ふくしの第一人者である木原所長の定義です。これは、福祉的課題や生活課題、生きづらさを抱えている人も身近な圏域の中で生活しているということであり、また、いざというときは、「あの人だったら助けてくれる」というつながりを日常の中で築きながら生活をしているということです。この小さな「顔と顔」の見える範囲は、マップづくりを行って住民の関係性の軌跡をつまびらかにすることで可視化することができますが、公的サービス圏域である第1～3層では発見しにくいということも併せて表しています。

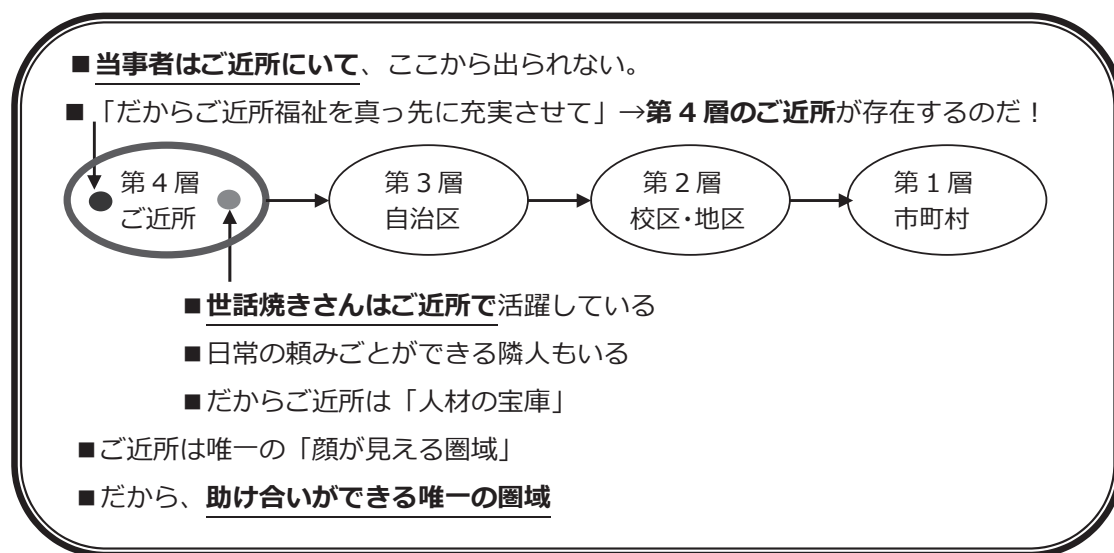
5年間のマップづくりの中で、釜石市社協は、この定義を基に行政区や町内会などにはとらわれない“概ね自治会の班2つ分の範囲＝30～80世帯圏域＝顔と顔の見える範囲＝ご近所”を1つのグループとして選定してマップづくりを行ってきました。マップづくりに参加した住民の方々は、同じ行政区や町内会に属しているにもかかわらず、“顔と顔の見える範囲”を越えてしまった途端に「この先の関係性は分からない」と話され、大ざっぱな回答しか得られませんでした。これは、住民同士は日常生活の中で関係を構築する際に、共通体験や共同作業を通じて相互理解や、お互いの相性、属性の中で密接につながりを持ち、恒常的に関心を持ち続けているということになります。しかし、この“ご近所”の範囲を越えると、例えば日常的な挨拶や回覧板などの関わりを持つ機会が少なくなることから、個々の関係性が把握できないという回答しか得られないのです。このことは、地域福祉の枠組みを考える場合において、管理上や便宜上に設けられた行政区や町内会などの区分けとは相いれないということを表しています。

地域福祉の推進に関わる者は、この“概ね自治会の班2つ分の範囲＝30～80世帯圏域＝顔と顔の見える範囲＝ご近所”を意識してマップづくりを行うことで、活用できる人材や資源、具体的なニーズを抽出することができ、この情報を活用することで住民一人ひとりが安心かつ安全で豊かな生活を継続的に送れる地域づくりを推進することができるのです。

また、ご近所には必ず世話焼きさんが1人は存在することがマップづくりで認識することができました。世話焼きさんとは、①自分の周りに困っている人はいないかいつも探している、②困っている人を見つけると食事ものどを通らないほど気になってしまう、③即座に行動に移す、④人間大好きというよりは、好き嫌いで相手を選ばず、そのため誰にも関わってしまう、このような資質を持った人だと言われています。世話焼きさんの資質は、教えられて習得できるものではなく天性のものであるため、世話焼きさんを養成しようとしても根本的に無理があります。人にはもともと“誰かと関係を持ち、誰かの役に立ちたい”という欲求があり、ご近所では世話焼きさんが有効的に活動を行

えるという結果が出ています。この5年間、マップづくりに協力いただいた住民の多くは世話焼きさんであり、世話焼きさんをバックアップしている人でした。また、世話焼きさんだと想定せずに呼んだ方が、マップづくり後、世話焼きさん（自覚症状のない世話焼きさん＝世話焼き予備軍）に変身していったという逸話もあります。ご近所には、地域に関心があり、誰かの役に立ちたいという芽を持っている住民が必ずいます。マップづくりを行うことで暮らしと近所に関心を持ち、その関心ときっかけさえあれば、世話焼きさんとして花開く可能性があるのだと分かりました。

これらについては、実際に住民への聴取を行い、マップづくりで生活の中で生まれる関係性を可視化してみなければ分からないことです。ご近所に住む住民でさえ分からない地域の情報や住民の生活実態を、市町村単位の遠く離れたところから眺めているだけでは把握できるわけがありません。「支援が必要な人も世話焼きさんもお近所の中にいるのだから、誰もがその人らしく豊かな生活を送れるようにするには、ご近所の福祉を充実させれば良い」という木原所長の言葉のとおり、まずはご近所という圏域を理解することからご近所ふくしは始まります。



引用：住民流福祉総合研究所「ご近所革命＜第1編＞ご近所福祉のつくり方 2017/8/1 改訂版」

なんで！？30～80世帯は顔と顔が見えるの？

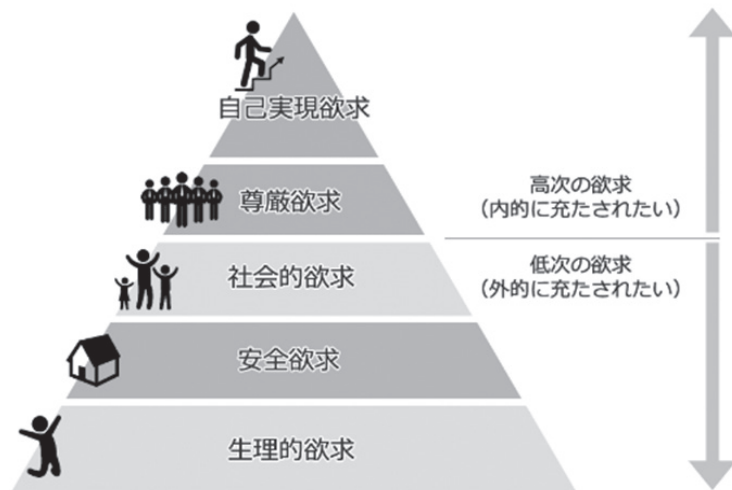
木原所長の提唱するご近所の定義は、なぜ30～80世帯（約100～250人）なのでしょう？ここで面白い研究があります。

イギリスの人類学者ロビン・ダンパー教授が定数化したダンパー数です。ダンパー数とは、「人間が安定的な社会関係を維持できるとされる人数の認知的な上限」とされています。ここでいう関係とは、ある個人が、各人の事を知っていて、さらに、各人がお互いにどのような関係にあるのかをも知っていることと定義されています。要約すると、「人間が安定した生活を求めていると、気が付かないうちに100～250人の集団になっている＝人が記憶できるのは最大250人まででそれ以上になると団体行動ができない」というものです。

木原所長が提唱するご近所30～80世帯は、人の心理や脳に刻まれている古代からの習慣なのかもしれませんね。

人と人との関わりは基本的欲求から生まれるもの

アメリカの心理学者のアブラハム・マズローは、人間の欲求は5段階のピラミッドのように構成されていて、低階層の欲求が満たされると、より高次の階層の欲求を欲すると説明しています。



第1階層の「生理的欲求」は、生きていくための基本的・本能的な欲求（食べたい、寝たいなど）で、この欲求を満たされると、次の階層「安全欲求」を求めます。

第2階層の「安全欲求」は、生理的欲求と併せて生命としての基本的な欲求の1つとなります。生を脅かされないことの欲求で、安全・安心な暮らしがしたい（雨風をしのぐ家・健康など）という欲求が含まれます。

第3階層の「社会的欲求」は帰属の欲求です。集団に属したり、仲間が欲しくなったりするなど、あるグループへ帰属していたいという欲求が生まれてきます。この欲求が満たされない時、人は孤独感や社会的不安を感じやすくなります。

そして、次に「尊厳（承認）欲求」（他者から認められたい、尊敬されたい）という賞賛を求める欲求が芽生えます。ここからは外的なモノではなく、内的な心を満たしたいという欲求に変わります。帰属の後に自我の欲求が生まれるのはごく自然のことです。なぜなら、他人からの賞賛を求める欲求は、グループへの帰属を前提に生まれるものだからです。

そして、最後に「自己実現欲求」が生まれます。これは、あるべき自分になりたいという欲求です。ここには自我の欲求である「人から賞賛されたい」とは異なり、ある種の無償性が含まれているのが特徴です。

引用：HP「モチベーションアップの法則／マズローの欲求5段階」

第2節

ご近所ふくしは“住民の流儀”を心得ることから始まる！

住民流に触れると、視点が変わり発想が変わる。

マップづくりの目的は、住宅地図にたくさんの関係線や印をつけて色鮮やかでキレイな地図をつくることではありません。あらゆる地区でマップづくりを行い、数をこなせば良いという単純なものではないのです。

マップづくりで目指すのは、「ご近所ふくし」の実現です。ご近所ふくしとは、30～80世帯の顔と顔の見える範囲で、住民の流儀に従って行われる関係性を生かした支え合いを言います。具体的には、支援を必要としている人の目線（当事者目線）でつくる福祉です。しかし、生活ニーズを持っていても、支援を受けるだけの一方的な立場ではないことの理解も大切です。これまでは、第1層の市町村からサービスメニューを下すトップダウン型でしたが、これからは、支援を必要としている人がいるご近所から福祉を始め、難題は上層に上げていくボトムアップ型の福祉に転換していかなければ一人も見逃さない福祉社会は実現しません。

地域福祉の推進者がご近所ふくしを推進するためには、主役は住民であること、住民には住民のやり方があること（住民の流儀）を心得ておくことが大切です。

住民の流儀には、次の6つのポイントがあります。

住民の流儀とは

（1）要支援者が助け手を指名。ご近所では要支援者が主役

- ・住民の流儀では要支援者が主導権を取る場合が多い。助け手を自分が見込む

（2）天性の世話焼きさんがリード

- ・ご近所には大小の世話焼きさんがいる
- ・地域は天性主義。要支援者も世話焼きさんを見込んでいる。養成は馴染まない

（3）相性の合う者同士で、おすそ分けとお返しの双方向

- ・一方的なサービスを嫌う
- ・信頼関係の下、義理と人情でやったりとったりしている

（4）一対一のやりとり

- ・相手をまとめない
- ・もちろん相性の合う者同士

（5）ミエミエの活動は嫌う

- ・支え合いは水面下で行っている
- ・相手が支えらえた（助けられた）と気づかない、支えられた（助けられた）ように見えないやり方が理想的

（6）ご近所は「私」的な関係の世界

- ・ご近所では、個人対個人の私的な関係の中で福祉が営まれている
- ・個人同士が自主性と相互の信頼、責任に基づいて、私的に善意のやり取り

引用：住民流福祉総合研究所「ご近所革命＜第1編＞ご近所福祉のつくり方 2017/8/1 改訂版」一部改変

ご近所の資源を探ろうにも、住民は水面下で支え合っているため、ご近所の現状や背景、住民が大事にしていることがなかなか見えてこないのが現実です。そこで有効となるのが、マップです。マップは、地域の資源情報を集めるツールでもあるのです。そうした資源に着目すると、何かしらのシグナルを出している場合があるので、それを実際に受け止めている世話焼きさんをマップから見つけていきます。そして、その世話焼きさんに関わっている人の暮らしぶりを聴取し可視化しながら、ご近所福祉を豊かにしていくための住民の流儀を押さえた上で、支え合いの関係性を結ぶお手伝いをしていくのが我々推進者の役目となります。ここで注意したいのは、支え合い、関わり合いという双方向の関係性を崩してはいけないということです。支援者はサービスや手助けを一方的につなぐことで良しとしてしまう傾向がありますが、住民流はそれを良しとしていないことに気付くのです。

【被災地沿岸部の地域の支え合いの状況】

ここで、岩手県社協が平成 28 年度に実施した、生活支援相談員が見守り対象にしている被災者（内陸部への避難者も含む。）約 15,000 世帯の中から 1,200 世帯を無作為抽出した実態調査の結果を紹介します。

◎近隣との関係性と地域の暮らしやすさ

図表24 地域の暮らしやすさ(単数回答)

		合計 (人)	満足	まあ満足	ふつう	少し不満	不満	無回答	『満足』	『不満』
全体		1,520	9.5	17.6	50.1	14.2	7.0	1.4	27.1	21.2
問9 受ける・困りごとを 相談すること	ある	333	19.2	23.4	42.3	10.5	4.2	0.3	42.6	14.7
	ときどきある	507	7.1	21.7	50.5	13.4	6.7	0.6	28.8	20.1
	どちらともいえない	194	3.1	13.9	60.3	15.5	5.7	1.5	17.0	21.2
	あまりない	288	5.9	12.8	53.1	21.2	5.9	1.0	18.7	27.1
	ない	181	12.2	8.3	51.9	11.6	16.0	0.0	20.5	27.6

「身近な人に手助けや相談にのってもらうこと」が「ある」あるいは「ときどきある」と回答した人の合計 71.4%が、今住んでいる地域での生活は「満足」と回答しています。また、「身近な人に手助けや相談にのってもらうこと」が「ない」あるいは「あまりない」と回答した人の合計 54.7%が、今住んでいる地域での生活は「不満」と回答していることが分かります。

図表24 地域の暮らしやすさ(単数回答)

		合計 (人)	満足	まあ満足	ふつう	少し不満	不満	無回答	『満足』	『不満』
全体		1,520	9.5	17.6	50.1	14.2	7.0	1.4	27.1	21.2
問10 ・困りごとの相談 にのる人	ある	225	20.9	21.3	36.9	12.9	8.0	0.0	42.2	20.9
	ときどきある	500	7.2	20.8	51.4	14.0	5.8	0.8	28.0	19.8
	どちらともいえない	283	7.4	17.7	58.7	12.7	3.2	0.4	25.1	15.9
	あまりない	327	7.6	14.4	53.5	17.7	6.4	0.3	22.0	24.1
	ない	167	9.0	10.8	48.5	12.6	18.0	1.2	19.8	30.6

反対に、「困っている人に手助けや相談にのること」が「ある」あるいは「ときどきある」と回答した人の合計70.2%が、今住んでいる地域の生活は「満足」と回答しています。また、「困っている人に手助けや相談にのること」は「ない」あるいは「あまりない」と回答した人の合計54.7%は、今住んでいる地域での生活は「不満」と回答しています。

図表24 地域の暮らしやすさ(単数回答)

		合計 (人)	満足	まあ満足	ふつう	少し不満	不満	無回答	『満足』	『不満』
全体		1,520	9.5	17.6	50.1	14.2	7.0	1.4	27.1	21.2
問13 周辺の地域の方 との関わり	自分から声をかけて 関わりたい	379	16.9	29.8	35.4	11.9	5.8	0.3	46.7	17.7
	声をかけられれば関わる	563	8.5	17.4	55.4	13.9	3.9	0.9	25.9	17.8
	どちらともいえない	404	5.9	10.9	62.1	13.9	6.7	0.5	16.8	20.6
	あまり関わりたくない	107	2.8	8.4	42.1	25.2	20.6	0.9	11.2	45.8
	関わりたくない	33	12.1	3.0	30.3	18.2	36.4	0.0	15.1	54.6

「自分から声をかけて関わりたい」という回答の46.7%、「声をかけられれば関わる」という回答の25.9%は、今住んでいる地域の生活は「満足」と回答しています。

一方で、「関わりたくない」という回答の54.6%、あるいは「あまり関わりたくない」という回答の45.8%は、今住んでいる地域の生活は「不満」と回答しています。

このことから、助け合いの機会が少なく孤立傾向にある人は地域での暮らし対し満足度が低く、近隣住民など周囲の人々との関わりの濃淡が地域での暮らしやすさの実感に影響を与えていることが分かりました。

手助けを受けることがある、また困りごとの相談にのることもあるという共通点を探ると7割の人が相互に助けたり助けられたりという助け合いの関係があるということが分かりました。反対に、他者と関わりを持たない人は、一層孤立を深めていく可能性が推測されます。

●住まいや年代による孤立の可能性

図表38 最もたくさん顔を合わせて話をする人(単数回答)

		合計 (人)	別居親族	相談員や行政・介護サ ビス事業所等の支援者	買い物先などお店の人	勤め先や学校の人	趣味仲間など友人・知人	近所の人	ほとんどいない	無回答
全体		1,520	17.6	5.8	3.4	18.2	21.7	23.4	8.0	2.0
対象分類	重点見守り世帯	198	16.2	14.1	5.6	7.6	17.2	①24.7	12.6	2.0
	通常見守り世帯	1,014	18.1	5.4	3.1	17.9	22.7	①22.9	8.1	1.8
	不定期見守り世帯	308	16.6	1.6	2.9	①26.0	21.4	24.4	4.5	2.6
年齢	20代	31	3.2	3.2	3.2	①45.2	29.0	3.2	12.9	0.0
	30代	52	19.2	0.0	5.8	①55.8	5.8	7.7	5.8	0.0
	40代	137	9.5	0.7	4.4	①54.0	11.7	7.3	11.7	0.7
	50代	205	15.1	2.9	1.0	①44.4	17.6	11.2	7.8	0.0
	60代	336	21.4	3.6	4.2	16.4	①23.5	19.9	9.5	1.5
	70代	430	14.7	6.7	3.5	2.6	29.5	①34.4	5.6	3.0
	80代以上	316	23.1	12.3	2.8	0.3	19.0	①30.7	8.2	3.5

図表38 最もたくさん顔を合わせて話をする人(単数回答)

		合計 (人)	別居親族	相談員や行政・介護サ ビス事業所等の支援者	買い物先などお店の人	勤め先や学校の人	趣味仲間など友人・知人	近所の人	ほとんどいない	無回答
全体		1,520	17.6	5.8	3.4	18.2	21.7	23.4	8.0	2.0
今の住まい	応急仮設住宅	617	17.0	6.2	2.3	18.2	21.2	①25.0	8.3	1.9
	みなし仮設住宅	153	①20.3	5.9	7.8	19.0	14.4	13.7	18.3	0.7
	災害公営住宅	265	20.8	7.5	4.2	15.1	19.6	①23.0	7.2	2.6
	東日本大震災で被災した後に再建した住宅	294	14.3	3.7	2.4	22.1	①29.6	22.8	4.8	0.3
	東日本大震災前と同じ住宅	104	20.2	4.8	2.9	10.6	22.1	①34.6	1.9	2.9
	その他	61	13.1	8.2	4.9	①29.5	18.0	13.1	9.8	3.3

「最もたくさん顔を合わせて話をする人」について、年齢別で見ると、20代、30代、50代は勤めや学校の人と多く接触していることが分かりました。60代は趣味仲間や友人、知人という回答が一

番多いです。一方、70代、80代はご近所の人と回答しています。このことから、年代が進むにつれて行動範囲が狭くなり、友人関係、ご近所の人と徐々に関係性の範囲が狭まってくる傾向があるということが分かります。また、応急仮設住宅や公営住宅等の住まいの状況から見ると、公営住宅や応急仮設住宅に住むほとんどの人が「ご近所の人」と回答しています。

このことから、ご近所の人たちとしっかりと交流をしておかないと孤立を招くおそれがあることが分かります。3割の人が支え合いの輪の中に入っていないということが今回の調査で確認されましたので、そういった方々に地域、ご近所全体でどのように関わっていくか意識を高めていく必要があります。

引用：岩手県社会福祉協議会「平成28年度東日本大震災被災者実態調査研究報告書」

(1) 近所点検 ～【知る】・【見つける】～

地域の中には、必ず支え合いがあります。その根拠は、人は誰かと関わらずには生きていくことはできず、人間の欲求として“人の役に立ちたい”、“認められたい”という根源的な欲求があるからです。そして、地域には必ず世話焼きさんがいて、「あなたはこれをやって」「あなたはそれをやって」とうまく住民をコーディネートしています。地域には必ず支え合いがあり、世話焼きさんがいるという実態を我々推進者が知ることによって、住民への応援のしどころがわかってきます。

こうした応援のしどころを【知る】ための近道がマップです。マップづくりをしていると、こんな支え合いがあるんだ、こういうことを住民の間で大事にしていたのかなど、実践すればするほどたくさんの発見があります。元看護師、元教師、元調理師など、近所は人材の宝庫だということもわかってきます。自然発生的に行っている支え合いというのは、取組でもなく、ボランティア精神や福祉という意識の下で行っているものでもなく、住民の間で自然と育まれたものなのです。近所ふくしを推進するためには、まずは自然発生的に行っている住民同士の支え合いをマップづくりを通して見つけ出し、実態を【知る】ことが必要となります。

それでは、近所を圏域としたマップづくりから見つけ出すべき（点検すべき）ことを確認しておきましょう。

① 気になる人を見つけよう

住民が気になっている人を見つけ、その人の安全が守られているか、困りごとが解決されているか、必要な介護やケアがなされているか、豊かな生活はできているかを調べます。

② 気になることを見つけよう

気になる理由は2つあります。1つは、実際に住みづらい原因が存在する場合（買い物が不便など）。もう1つは、近所で住民は豊かに生活しているかです。

③ 住民同士の支え合いを知ろう

気になる人をサービスにつなげるだけなら、気になる人に印をつけるだけで十分ですが、支え合いの地域をつくるためには、気になる人に住民の誰がどのように関わっているかを調べる必要があります。

④ 見込んだ人を見つけよう

気になる人である本人が、自分の問題を誰に解決してほしいかを探るべきです。今の福祉では、要支援状態が分かると、どのようなサービスを提供するかを支援者側が決めてしまいます。本人はもっと高い要求を持っているかもしれないに関わらず、支援者がそのレベルを決めてしまうのはおかしい話です。

⑤ 世話焼きさんを見つけよう

近所では既に世話焼きさんが気になる人に何かしら関わっているはずです。丁寧に聞き取りをしましょう。

⑥司令塔役を見つけよう

福祉活動は町内会や民生委員が行うものと思われていますが、主役はご近所の住民です。世話焼きさんたちをコーディネートする役割を持つ超大型世話焼きさんは、第3層からご近所の活動を支援しながら、難題でも極力ご近所の手で取り組むように応援する役割があります。また、第2層や第1層にその役割を伝えていかなければなりません。

支え合いマップと福祉マップとの違い

福祉マップは、気になる人や支援が必要な人を地図に印をつけるだけです。支え合いマップは、それらの人に周囲の誰がどのように関わっているかも調べます。地図上に関係性を線で結び、気になる人の生活課題を調べていく中で、課題解決のヒントも探っていくのが支え合いマップです。

様々な場面で、福祉マップ、要支援者マップ、ハザードマップなどのマップがつくられています。支え合いマップに取り組むに当たって、ご近所に理解者ばかりいるわけではありませんので、最初は福祉マップなどを切り口に取り組んでいき、徐々に支え合いマップに広げていくというやり方もあります。

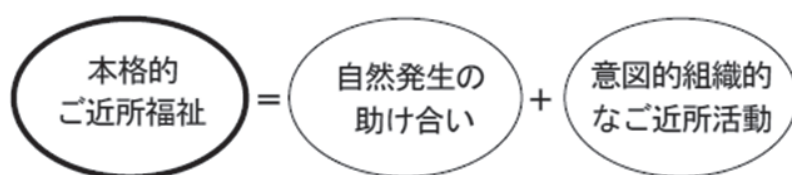
(2) 整備 ～【振り返る】・【考察する】～

マップづくりを通して、ご近所の課題だけでなく世話焼きさん等のご近所のお宝も見えてきたら、次に課題を解決するためにどのように取り組むか（取組課題）について住民と一緒に話し合います。「このような問題がありますね」、「ご近所にはこんなお宝があることも分かりました」、「これらのお宝を生かして、少しでもご近所を良くするためにどんな取組ができそうでしょうか」などと、推進者は住民の皆さんが自分事として感じられるように説明や提案をしていきます。1回のマップづくりで、実態把握だけでなく取組課題の話合いや提案までできれば一番良いのですが、なかなか一筋縄ではいかないものです。そのため、2回、3回と回数を分けながらご近所にお邪魔することをお勧めします。その都度、前回のマップづくりの振り返りを行い、必ずご近所の強みやお宝に触れながら取組課題を見いだしていきます。同じ地域にずっと住んでいる住民は、他の地域と自分の地域を比較することはあまりないので、第三者から自分たちのご近所を評価してもらうことは、自分たちの地域の価値を確認でき、実践活動へのモチベーションや自信につながることでしょう。

そして推進者は、マップづくりで把握した住民流の支え合い活動について、“現状維持で良いか”、“変化させたほうが良いか”、“強化させたほうが良いか”などを考察した上で、住民が活動の重要性や有用性を認知できるように関わっていきます。

(3) 補修 ～【意図的な働きかけ】～

住民との振り返りの中で、自然発生的な支え合いだけではどうしてもご近所内の気になる人や支援が必要な人をしっかりと支えることができないという事態に直面する場合があります。その場合は、自然発生的な支え合いを生かしながら、推進者がご近所に意図的に働きかけ、更に強固なご近所ふくしの体制をつくっていかねばなりません。

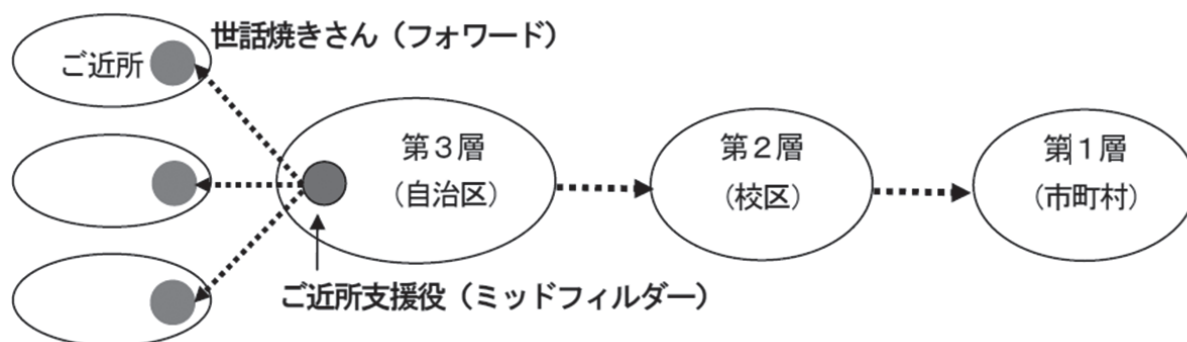


引用：住民流福祉総合研究所「ご近所革命＜第1編＞ご近所福祉のつくり方 2017/8/1改訂版」

そこで、推進者は、マップづくりを通して把握した“天性の世話焼きさんの資質を持ち合わせた住民”に働きかけていきます。世話焼きさんといえども、普段から「支え合い」や「福祉」を意識しながら生きている人ばかりではありませんので、マップを用いて地域の実態を示しながら、住民の困りごとや住民相互の支え合い、ご近所に不足している活動などを共有し、自分事として意識してもらう必要があります。今現在は特段困ってなくても将来困ることになるであろうという、不確かな将来への課題に対して自分事として意識してもらうことは、簡単なことではありません。世話焼きさんにご近所内の困りごとを共有し、解決するための方法を話し合う機会を何度も積み重ねることによって、少しずつ住民の意識に変化が表れてきます。住民が“これなら私でもできる”、“これならやってみよう”と思うこととご近所全体の課題がちょうど重なったところが、取組課題の出発点になることが多いようです。

世話焼きさんの中には、各ご近所内にいる世話焼きさんを束ねてコーディネートする超大型世話焼きさんがいる場合があります。超大型世話焼きさんは、世話焼きさんたちをバックアップしたり、活動を指示したりできる人で、第2層や第1層にも人脈がある人です。超大型世話焼きさんをリーダーにして、住民みんなが参加できるような活動を話し合っていきます。超大型世話焼きさんがいない場合は、民生委員やご近所の世話焼きさんにリーダーになっていただくと良いでしょう。

ただし、組織的な活動に偏りすぎると、住民の流儀からは外れ「支える側」と「支えられる側」という一方的な溝を生み出すとともに、世話焼きさん自身が福祉の関係者になってしまい、住民は離れてしまうことがあるので注意しなければなりません。推進者は、住民の自発性や自主性を損なわないように補強ギブスをはめて組織化し、住民に気付かれないうように、時期が来たらそのギブスを外してあげます。あくまでもご近所ふくしの主役は住民で、住民の流儀に沿って進めなければならないため、推進者には補強ギブスの取り付け・取り外しの絶妙なタイミングと力加減が求められます。



引用：住民福祉総合研究所「ご近所革命＜第1編＞ご近所福祉のつくり方 2017/8/1改訂版」一部改変

第3章

推進者のためのご近所ふくしの整備手帳

第4節

さあ、マップづくりを始めよう！

前述したとおり、ご近所では、要支援者などの自尊心を守るために周りからは分からないように水面下で支え合っています。その支え合いなどをつまびらかにするために、支え合いマップに取り組んでいくのです。

マップづくりには以下のルールがあります。ルールを守らないと、欲しい情報や取組課題を得ることができないので、ルールに沿ってマップづくりに取り組みましょう。

(1) 有効な進め方

- ① ご近所から5人程度の住民を招集
住民1人が分かる情報は、10世帯程度
- ② 招集する住民は女性が有利
ご近所内のふれあいをよく知っている人となると、断然女性が有利
- ③ 民生委員や町内・校区組織の関係者はオブザーバー参加
関係者が参加すれば、ご近所で出た情報を持ち帰ることができる
- ④ できれば住民主体で進行・聴取
ご近所の人たちによる主体的なマップづくりなので、基本は住民が行うのだが、マップづくりは一定の技術や知識を必要とするため、社協職員や民生委員等が進行・聴取役を引き受けることもあり得る。
- ⑤ 1回当たりの作業時間は1時間半
これより短いと情報が出てこず、長いと疲労してしまう
- ⑥ 取組課題の整理
1時間半の作業後、休憩を挟み、「取組課題」を整理するための時間を1時間半とる
- ⑦ 複数回に分けて実践
1回の作業では十分な情報を得られないため、複数回に分けて行う

(2) 用意する道具

- ① 約50世帯の住宅地図
約50世帯（30～80世帯）の圏域の住宅地図を模造紙大に拡大したもの
- ② 色マジック
太いマジック。色は自由だが、黄色は見えにくいいため避けると良い
- ③ 丸いシール
丸いシールを数色用意すると、要支援者の種類ごとに色分けして印をつけるのに便利

(3) プライバシー問題への向き合い方

出来上がったマップとその情報は、あくまでご近所の支え合いを進めるためのものです。したがって、マップづくりで出た情報はご近所内に閉じ込めましょう。ご近所外には出さないということです。

マップ作りはご近所内で助け合いをすることが目的であり、そのためには、ご近所内ではお互いの情報を共有する必要があります。本当に要支援者を助けようとするならば、ご近所内のあらゆる情報をオープンにしなければならない場面も出てきます。本当に助けたいのか、それともプライバシーを守りたいのか、二者択一になります。

* 釜石市社協 菊池課長から“住民をマップづくりに導くための秘訣”を聞きました *

◆ 支え合いマップの効果を語れ

我々地域福祉系の職員は、期せずして支援者目線の福祉を推進しようとしてきました。しかし、木原所長が長年研究してこれたように、地域福祉実践は当事者発地域（ご近所）発であるべきだし、その視点や発想の転換に「推進」のカギがあると今では確信するに至っています。そうした我々の実践の限界とご近所ふくしの可能性について、住民にしっかり説明できるかがポイントとなります。お誘いする職員自身が、この説明を曇りなくこなせるようにならなければ、住民の参加を継続して得ることは難しいと感じています。

◆ 社協看板の「重み」

意外（?!）に効力を発揮するのは、「社協」という看板の信頼度です。諸先輩方が長い間積み重ねてきた「信頼という貯金」の重みは決して軽くありません。この看板ゆえに地域は受け入れてくれる実感があります。地域に根ざし、顔の見える関係性を幾つ構築しているか日常活動が問われています。

◆ 半信半疑はバーターで

そうはいつても、現実には、初めから十分な理解で参加するものではありません。しかし、あの人に頼まれたら断れない、という貯金を日常活動で培っておくことも大切です。地域住民は、ある意味バーター（義理人情）で生きている？

◆ 防災や要支援者マップなどもミックス

住民は決して普段から福祉課題を認識しながら暮らしているわけではありません。地域生活の営みは様々な要素で構成されていて、関心も世相を反映する部分もあります。であるならば、関心の高い分野から着手し、徐々に支え合いマップにつなげる手法もあります。少し回り道になるかもしれませんが、入口は防犯防災マップ、要支援者マップでもかまわないと思います。

◆ 関係（属）性を重視する

民生委員や町内会婦人会、サロンや地域活動の担い手、公民館の参加者など、様々な属性が地域には存在しています。その属性ごとに声掛けするのも有効です。

◆ 「場」に応じて謝礼も

代表聴取に応じていただく場合には、感謝の気持ちを現物にかえる努力も必要です。食事（弁当）の提供や記念品など、できる範囲で協力を謝意を示したいところです。

◆ 信念をもって説く

第4層に暮らす住民の暮らしぶりや関係を明らかにして、そこから見えてくる地域の強みや弱み、福祉的課題を解決するための取組について提案するならば、住民の聴取から構成される支え合いマップの果たす役割は大きいものです。ご近所における福祉の営みは、専門職によってもたらされるものではありません、住民に教えていただくほかないのです。そうした信念をもってお誘いしています。

◆ 住民への丁寧な説明でプライバシー問題を突破

マップづくりに入る前に「井戸端会議の延長ですよ」、「社協から今回の情報を外に出すことはありませんよ」、「民生委員の活動上で知り得た情報はこの場で出す必要はありません」など、具体的な説明を繰り返すことで、プライバシーの問題で強く言われることはありませんでした。木原所長が「福祉の営みは自分を開示することから始まっている」と述べています。ご近所では好むと好まざるとにかかわらず、暮らしぶりは自らだったり、こじ開けられたりして開示されているものです。

そうした情報にご近所ふくしのカスタマイズに必要な要素が含まれていることが多いのです。